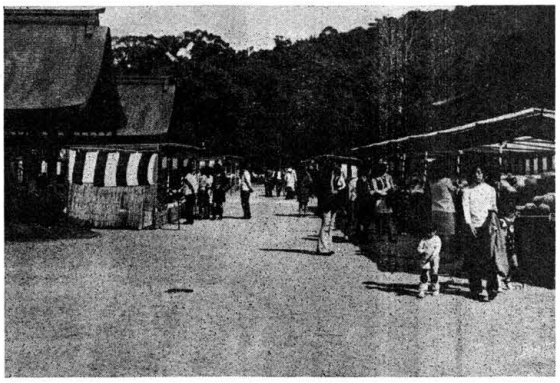
宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像
福岡県宗像郡玄海町
電話 09406 ② 1311 代
年定価一送料共 1000円

神具、装束
結婚式場用品
九州店
本社
株式会社
井筒
福岡市博多区東公園二一三一（〒八三）
電話福岡（九二）五一—九四五六番
京都市下京区油小路八条北入（〒六〇）
電話京都（〇七五）三八一—三四一（代）一四番
（〇七五）三八二—一一三六・〇六六番

初冬の小春日和につつまれて
遷宮記念大祭斎行



遷宮記念大祭は、十一月一日から二十日まで数々の神賑行事を含めて盛大に執り行なわれた。

十一日には宵宮祭、十二日に記念大祭が厳粛裡に斎行された。この期間中は、一日、十五日の月次祭、三日の明治祭、十五日から十五日までの七五三祭と諸祭典が相ついで斎行され、氏子崇敬者をはじめ多くの参拝者が、敬虔な祈りを神前に捧げた。

一方境内各所で文化、体育の神賑行事が開催され、社頭をおおいに賑わすとともに、神人和楽の日が続いた。

西日本菊花大会は、一日から二十日まで開かれ、九州全域から集まった約三千鉢の菊花で境内はおおわれた。

三日午前八時三十分、本殿脇において奉納剣道大会が行なわれ、豆剣士をはじめとする五百名の選手が熱戦を展開した。

十一日清明殿において、第五回宗像大社献詠短歌大会が開催された。好天に恵まれ二百余名の参加者が来場、短歌に対する熱心な意見交換が終日おこなわれた。

また十一日から十六日まで祈願殿ロビーでは、奉納盆栽展が開かれ、本年度より粗屋の愛好会から賛助出品もあり、百数十点の出陳鉢に参拝者が注目、益々充実した展示会となった。

またこの間、奉納吟詠大会、奉納茶道大会、宗像大社本因坊戦と各種神賑行事も相ついで行こなわれており、宗像の初冬の風物誌として定着、この地方を訪づれる人々の楽しみとなっている。

第五回献詠短歌大会

第五回を迎えた宗像大社献詠短歌大会（宗像大社主催・毎日新聞社後援）は、去る十一月十一日（木曜日）午前十時から行なわれた。

この大会は福岡、北九州宗像等の各ブロックの短歌会を統合し、県内の同好者の交流と、文化の昂揚、斯道の発展に寄与する目的で、年一回の合同短歌大会として発足以来五年目を迎えた。また当大社としても、この大会を遷宮記念大祭の神賑行事の一つとして毎年十一月十二日の宵祭の日を開催日として今日に至っている。

当日は好天に恵まれ、約二百名の参加者が続々と来場、定刻、まず献詠神事が厳そかに斎行され、大会に移った。

会場は終日熱こもった意見交換や、選者からの講評を戴だき有意義な一日を過し、午后四時互いに再会を約しながら閉会した。

選票は、作品集と投票用ハガキとを、あらかじめ選者と各寄稿者とに送付し、各々十首を選び返送されてきたものを集計、入賞八首、佳作十首とを選んだ。このうち十人の選者による選者三首、出品者による互選五首と佳作十首を決定した。

尚、開催規約により、大会当日の不参加者は得票上位の方でも入賞の資格はない。

優秀作並に成績は次のとおり

選者選

福岡県知事賞
留守なれば郵便受に悪戯を捕して帰りぬ我と知るべし　八幡　中山道行

宗像大社賞
鍵の束鳴らして戻ると走りしあと玉砂利にけふの残照染みぬ　中村重義

毎日新聞社賞
不具を歩く日のやがて来む幼孫独り愛しく積木遊びす　土井明

互選

第一位（福岡県教育委員会賞）　若松杉本静乃

レイテ沖に未だ沈みて遺骨なき吾子の墓処に盆の灯ともす

第二位（毎日新聞社賞）　友田中間子

合理化で解雇されしは秘めたれど今宵酔わめを妻は訝かる

第三位（〃）　宗像山本夏枝

柩の蓋つひに閉ざされそのきはに酒にて父の唇を湿す

第四位（〃）　今村重刀

夕凪に撒く農薬の舞ひ散りて霞の如く青田をつつむ

第五位（〃）　小倉細谷登美子

甘えてはならぬと思ひ甘えむと思ひ来たりて子の家に寝ぬ

佳作入選（作品は略しました。）

吉田ますみ〈宗像〉　有田ゆりこ〈宗像〉　河中靖喜〈小倉〉　松坂すず子〈八幡〉　田木うめの〈宗像〉　小方実〈宗像〉　藤崎辰子〈宗像〉　松尾美〈福間〉　中野節子〈玄海〉　藤田豊〈福間〉

論説
老境が描く信仰図絵

宗教学者の所論には、老人と宗教という課題の下に信仰現象を取りあげている場合が少くない。老人と宗教、それは極めて常識的な図式である。そして取扱いも容易な現象でもある。

近来は、宗教と言えば、仏教神道を問わず、若い人の間に命脈を維持しているものは、祭礼供養の行事自体であって、その行事を支えるものは本来の信仰ではない。娯楽が観光か、そのいずれかを支持の起点としている。それでなければ、近代の経済的事情が行事を捨て去ってしまう。

地方公共団体や観光関係事業の組織が、多額の出資を心諾し、しかも伝承の本来の姿を逸脱してまで派手に宣伝開催するのは、単的には金もうけの外はない。客を集めて金を落させる企画が、信仰行事を興業化している。見世物扱いにしているのである。

従って老人が心から強い信仰に燃えて、法灯道灯を掲げる安心立命の精神など問題にはならない。華麗な行事の見せ場は持たなくても、老人と宗教、それは永遠に捨て去れない人間生活の図式である。宗教学者の重要な解明課題でもあると言えよう。

他の宗教は暫く措く、ここに示す神道関係者の老境に着目して、神道人として生きた信仰が、人生の終幕時にどのような現実を見せているかを考えたい。

老後種々の不幸に煩悶苦悩する者決して少くない。愛児に先立たれたり、先祖伝来の祀職の後継者が高校にも入れない愚評であったり、逆に頭が良いため勿持ちを嫌ったり、家庭の暗転不遇は如何に巧みに隠しても偽れである。最も多く見聞するのが、長く老体を病床に養って苦吟する老境であろう。それが少くない。

若い頃から一応まじめに奉仕してきた者が、業病に倒れて動けない。見舞うと、身から出た錆、と独語して投げやりな人生観でも打ち出す場合ある。世のために祈り、人の幸福のために担ぎ、どうして痛く痛い錆に苦しむのか。まして今個人的福利信仰を心信とする厄除祈福の社頭に数十年、商売繁昌家内安全の幣を振り続けた老体が、病床に医薬を持ちて痛苦に泣くこうした姿に接すると、因果応報の解釈をどこに求むべくもない感が迫る。

孝行者、律義者、努力家、人情家、そうした人々が国家のために兵士になって戦死が目立ち、逆に家庭破壊者、怠け者、悪徳者と喪弾される人々に敵弾は当らず、生命を完うして帰還し悪辣なやみ商売に権勢を築く。信仰と離れて考えても、いわゆる浮世の不合理は因果応報の裏を行く。

特に神道人の老境の病苦不遇は、若い人に深刻な疑問を投げかける事例が少くない。ある社年の神道人は言った。「祖先崇拝教と称される神道は、個人に栄達も利福も与えない。氏族の祖霊を仏って慰める感謝するだけで、安楽な晩年を祈るべきでない。安心立命の幸福感を味わえる老境など、祀りに求むべきでない。そう結論する時がある。老境の神道人は何を考えるだろうか、自問自答することさえある」と。老後の安らぎは、仏陀の慈悲か天主の博愛に求める外はないのか。神道人の南無阿弥陀仏はなかろう。

結びに、最近目についた日本人の老開拓者の手記の一節を拾って、老境と信仰なるテーマの思案の一法としたい。米国アリゾナ州の州都フェニックス市に住む、八十三歳と七十七歳のYさん夫妻は、砂漠の仏教徒として安らかな余生を送っている。アリゾナ砂漠に若い開拓者の五十余年の労苦は、積善の余慶に恵まれて家庭心身共に平穏安泰の毎日である「若い時は働くことが生きがいであり、宗教でもあった。だから教会は社交集会所に思えた。然し今は違う。私の生きがいを支える場所になった」Yさん。この教会とは彼等日系人が建てた仏教教会をいう。なお夫人は手記を次のように結んでいる。

「死ぬまで断ち切れぬ煩悩を心に宿している私と知りつつ、み手を差し伸べて下さるみ仏のお慈悲を思えばありがたく合掌して、今の私は心安らかに幸せでございます。いつまで生きさせていただくか分りませんけれども、過去は忘れて一日、一刻をみ仏さまを拝みながら暮しております」と。

遠く異国に在って今は老ゆ。安らかな隠退生活は人間の理想であり、そこには信仰も生きている。

阿蒙少言

ある指導的立場にある共産主義者が、信仰の自由とその保障について見解を発表したことがある。高度の共産主義社会が実現する段階になっても、布教の自由は保障され宗教の侵害はない。信教の自由は科学的社会主義による社会構成に、有害でな矛盾もないと力説した◉マルクスの宗教阿片論を弁護すると共に、宗教団体が結束して支持政党を一本化する方針を敢して非難している。どうやら信教の自由保障をうたって、唯物史観に立つ無宗教の基本原則をポヤかして、キリスト教や仏教の信徒からも支持を得たい腹の内が見える◉唯物史観に立つ科学的社会主義の理論は、欧州の歴史に見る宗教団体の権威が人民を圧迫し忍従せしめた専制国家時代のもので、単純に信教の自由それ自体を軽んじたのでないとの弁護論は苦しい◉同一信仰を信奉する宗教者が、信教上の同調行為の理由から団体組織を持つのは当然であるが、そのために組織所属の全員が特定の政党を支持するのは、政治への自由な判断力を抑制するものであって、団体機関の決定と義務づけは正しいことではないとする。暗に公明党と創価学会の結びつきを指摘している◉こんな宗教信奉者からも支持を得たいと狙った自由保障論は、政治的意図から出たもので、殊に各種の宗教団体の指導者を対象としている。階級的搾取と彼等の言う社会悪が除去された暁に、信教の自由とか禁止とかの問題が何の論議の必要があろうか。要は選挙の一票を誘う理解協力の背景をひかえていることは明白◉マルクスの宗教阿片論とは別個に、人間精神の充実を図るものとしての宗教禁止すべきでないも、人間社会はどんな体制になっても、苦悩は存在する、と人間味強調はよい◉精神に拘束はない、従って保障はいらない。

（白雲）

第一八五回　宗像大社歌会詠草

毎月一日／切　詠草到着順

宮田片山一
冬木々の秀に顕る庭の満月は一つの星を伴してゆく

津屋崎占部由久
代る代る娘等の介抱うけながらこ数日のたのしきくらし

宗像立花勇雄
暮れせまる刈田の中に白鷺の時雨に濡れて餌をあさる見ゆ

田久小方実
暗きかげ容赦はあらず大いなるうねりの如く師の身に迫る

福岡吉田信夫
家解かれ無宿となれどたくましく三尾の猫は肥えて生くるよ

武丸原田リノ
柿の葉の落ちつくしたる裏庭は明るくなりて新鮮きわ

宗像天野トモエ
朝霧に淡くつつまるコスモスを夢まださめぬ心地して見る

東郷田中春子
危なげに見ゆる息子の商法に立ち入り難き気迫こもれり

阿蘇花田寿子
老人ホームのベットにわれも手拍子とりぬ友等の器楽廊下にひびきて

河東花田のぎく
姉かとも親しむ友の賜いたる青きマフラー吾は着けいる

福岡桜井ツ子
秋日ひ公園に驚の紐ふかし伊都の女王はここに睡れる

武丸原田まつ代
病院より息子の舗道勤務学生数多駅へと急ぎつ

宗像八波五月
鍋鶴の今年も九羽先がけて心せかるる冬ごもりぬ

福岡江崎琴子
七夕夫の遺愛の庭よいつまでも生きつづけよと樹木を育つ

深田中野節子
やうやくに水を飲みたり我が胃の腑の胃カメラ撮りて安らぎてをり

戸畑田中ハツセ
長椅子に飛びはねる児を見てるしか幼も真似て体を上下す

東郷藤崎辰子
秋の七草を摘まむたくらみ花鋏もちて早朝の散歩にしたがふ

宗像吉田直志
幼児をたたせて老に席ゆする若き母人の教養たかし

宗像今村重刀
新築の棟高だかと五色の旗秋空の下風にひらめく

宗像鷲津かつ代
いちはやく季（とき）は移りて街路樹のもみちせぬ葉も木枯に散る

東郷藤崎辰子
秋の七草を摘まむたくらみ花鋏もちて早朝の散歩にしたがふ

宗像吉田直志
幼児をたたせて老に席ゆする若き母人の教養たかし

福間広渡一寸毛
大相撲の幟はためく晩秋の春足草し街の夕映え

徳重石松やす子
二時間の飛行に越えし幾山河今故里の土を踏みしむ

福岡江崎琴子
七夕夫の遺愛の庭よいつまでも生きつづけよと樹木を育つ

武丸立石ろせ乃
何となくこころにかかる一つ一つを思ひつつくれば木犀匂ふ

鐘崎村田四郎
明けぬまに魚売りに出でし蜃女づれ帰りのバスにつくらくの夢

祖先のふるさとを訪ねて
能登・輪島から参拝

日本列島を洗う海流には、南から北上する暖流、すなわち黒潮と北から南下する寒流、すなわち親潮がある。

黒潮は、フイリッピン、台湾の東北を北上、一部東シナ海にはいり、北上して北海道東岸におよんでいる。宗像の沿岸を洗うこの海流は、古代から豊富な海の幸をこの地にもたらした。

この海流に乗って北上した漁取の気性にとんだ人々がいた。鐘崎の海士がこれである。この人びとは長門国向津具半島の大浦、長門と石見の国境にある宇生の磯と山陰の沿岸を次々に漁をし、その一群は遂に永禄年間（一五五八―六九）には能登の輪島に至っている。

「輪島誌」は、よくこの間の事情を伝えている。

〈土俗の伝うる所によれば、永禄年間筑前国宗像郡鐘ケ崎の海人又兵衛なるもの漁船三艘に男女二人を率い能登国羽咋郡に漂着し、赤崎、千の浦辺の海岸に仮小屋を作り、此処を根拠として同郡及び鳳至郡珠洲郡の沿岸島与に鮑を捕る。その后鳳至郡北浦北端（今猶海人屋敷と称しその遺蹟あり）に移住し、天正年中藩祖前田利家巡視に際し、熨斗鮑を献じて謁を賜い、鮑倉島及び七ツ島にて鮑を獲ることを許され、又毎年米塩を給し乾鮑及び熨斗鮑を納めしめ時価をもって買上げ諸運上及び米塩代に換算し、不足あれば納金を命じ、剰余あれば還付する等、特別の保護法を与えたり、寛永年間に至り男女一五〇人となり―中略―依て転地を請願したりしに国主前田利常輪島町鳳至町の地内一〇〇〇歩を割きて之を賜い住所を定しむ。今の海士町是なり、〉

この輪島に土着した人びとは、常に故郷の宗像を想い、なつかしみ、舳倉島に鐘崎海士の尊崇する宗像大神を斎き祀る奥津比咩神社を創建した。爾来数百年この神社は能登の漁士によって崇敬をうけ今日にいたっている。

去る十一月二十二日、この奥津比咩神社中村稔宮司外氏子の方々一行五名が当社を参拝された。本殿参拝后、宝物館拝観をおえた一行は、鐘崎海士の菩提寺として名高い泉福寺に参詣し帰途についた中村宮司は当社参拝の感激を次のように語られた。「かねがね御本社参拝を志していましたが、本日その念願が叶い歓びにたえません故郷へ帰ったような感激をかんじながら参拝させて頂きました」

〝ふるさとのまつりを〟
昭和五十二年度祭事暦

当大社年中祭事をコンパクトにまとめたカレンダー「宗像大社・まつり暦」を発行した。

発行部数一万部。縦四十六糎、横十六糎のサイズ、十二月組。年中祭事、行事を水彩画で美しく描き、一月は「新年祭」、十月は「みあれ祭」というようにそれぞれのまつりを月ごとに描写している。

たとえば、十月「みあれ祭」、（十月一日、秋季大祭にあたり、沖津宮、中津宮の神様を辺津宮へお迎えする海上神幸を一名〝みあれ祭〟とよびます。中秋の玄界洋上を渡御する数百隻の大船団は往時の宗像水軍の偉容をほうふつさせるものであります。この日から日間に渡ってとり行われます。）と解説を付け、祭典の日時を織り込んでいる。この暦があれば、当大社の年行事が一目でわかる。

昭和五十二年「まつり暦」は、十二月二十日から社頭で参拝者に授与する。

写真　〝一月〟初詣で風景

正月授与品より
―一刀彫「巳」―

来年は「巳年」である。当大社では全国でも数少い干支守「一刀彫」を例年通り正月元旦を期して社頭で授与する運びとなった。

この「一刀彫」は素材を「楠の木」に求め、伊勢在住の名工が「一本のノミにより精魂こめ仕上げた素朴な中にも気品のあるもので正月の縁起御守として有名である。例年月三ケ日で無くなる希望者の方全員に授与出来ない位である。

来年は「巳」ということで作者も非常に苦労したとのこと。出来上りも良く数に制限が有り早くも予約等の申し込み問合せが相ついでいる。

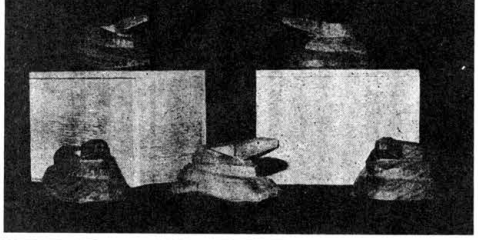
当大社としては出来るだけ多くの参拝者の方に授与出来るよう予約を制限し、社頭で授与することとなった。

この「巳」と言われる「えと」は弁財天信仰では財運をもたらすとして尊ばれている。

一昨年来の不況を来年こそは吹き被い福徳円満な家庭を築かれることを願って止まない。

記

一、初穂料　一体　二〇〇〇円也
一、体　数　七〇〇体
一、授与方法　各授与所
　　×　　×
　　×　　×



バターの国に戻る

三週間の欧州研修旅行も、ロンドン空港出発をもって全行程を終ることになった。ハイジャック事件が頻発する今日、空港の検閲は他国に比して特に厳重であった。これも英国らしい感じた。

男女別にカーテンを垂した布で身体検査、荷物はどんな細かいものでも中身はすべて見逃さない。その点この空港出の後の空中混乱を聞かない警戒ぶりは、秀れた施策とみとめた。

西独のハンブルグで日航機に乗り換え、ノールウェー北辺の寒村部落を遠かに見おろした後は、北極圏の氷原を飛んで何の風情もなく手紙を書いた。軍事郵便検閲官を命ぜられていたので、出し易い点もあったが、結婚十ケ月の姓娘の新妻を残して出征した心情がしのばれる。

その新妻も四人の男児を育てて世に出し、今は草花いじりと孫相手の喧嘩が仕事の二隠居、半句先生はババアと呼んでいる。欧州旅中一度もこのババさんは、思い出してもらえなかった。職場を駆け廻っていた頃とは大変な違いだが、誰でもそんなことであろう。

日航機は最後のコースへ飛びたった。やがて日本列島に接近する頃、今度はスチュアデスがその服装には不似合いのざるそばを配る。すしに次いで日本の味を噛みしめさせる趣向である。ともに日本特有の料理代表で懐しさはあるが、現代の母国は日本の味を喜ぶ国情ではなくなっている。敗戦という史上空前の大惨劇を転機として、すしやそばはあっても、その味を真に楽しむサムライ日本人が見られなくなった。悲しくもバターの国日本人となったのである。

勿論、精神的な話に於いてである。終戦直後の焦土の街に、餓死か悪得か、法規を守って五十日の食糧難配給を忍ぶか、闇取引の米麦を食って営養失調を免れるか。貧い者、権力のない者み敗軍の食糧事情を懇望願願した。

そしてもう尽忠報国、滅私奉公に身命を賭けて悔いない日本人の姿ではなかった。ある古老は乞食民族と自嘲した。命の綱の配給衣食とはいえ、昨日まで鬼畜米英、怨敵撃滅と指呼した敵軍に哀願する国民たちがさっては、乞食民族の自嘲も浮ぶであろう。

その史上に類例のない惨憺たる敗戦活に、サムライ一も日本の味も消えてバターの国の人ともなれる。海外旅行の総決算として、深刻に祖国日本と日本人とを考え直さなければ、横文字の結果バターの国を遍歴した意義は薄いものとなろう。

自ら先進国と誇る、後進国を開発途上国と呼んで援助の匂いをみせる、輸出産業の好調にのぼせて海外で成金風を吹かせる。物質文化がいかに向上しても、利潤追求の企業がいかに発展しても、民族の精神的風潮が復興しない限り、エコノミック・アニマルの譏りはぬぐい去れない。

ある宗教団体は、東南アジアはじめ弱少民族や植民地の救済解放のために聖戦を起し、日本が世界の犠牲になった説。釈迦は「嘘も方便」とうそぶき、孔子は「巧言令色、嘘をつくな」と叱る。嘘でごまかさずに、真実の反省こそ大事。

（風来子）

外遊雑話

猫も杓子も (20)

麦を食って営養失調を免れるか。貧い者、権力のない者み敗軍の食糧事情を懇望願願した。

そしてもう尽忠報国、滅私奉公に身命を賭けて悔いない日本人の姿ではなかった。ある古老は乞食民族と自嘲した。命の綱の配給衣食とはいえ、昨日まで鬼畜米英、怨敵撃滅と指呼した敵軍に哀願する国民たちがさっては、乞食民族の自嘲も浮ぶであろう。

その史上に類例のない惨憺たる敗戦活に、サムライ一も日本の味も消えてバターの国の人ともなれる。海外旅行の総決算として、深刻に祖国日本と日本人とを考え直さなければ、横文字の結果バターの国を遍歴した意義は薄いものとなろう。

こうのみなと神湊 (64)

楠早鳥作
福田長画庵

幕府（その四）

その夜、明継は国許から来た二人の使者と会い、三通の書面をしたためた。

館に帰ると隈眼の女人が迎えた居室に入ると部屋は胡風に模様替していた。寝台を置き鶏（うずらぬ）を垂らし、その中を麝香のかおりが濃い、妖婉な心いきを醸しだしていた。〈何故、弥太はおれにこの女を預けたのか〉そんな思いが頭をかすめたが共に寝台にうち伏した。

義弘の使者が到着したのは亥刻（午后十時）に近かった。とりすがるような貴い瞳を後に残し、衣服を改めて明継は部屋を出た。

「貴公が御使者か！」

森田掃門信義、かって明継が山口入りをして以来親交の深い仲であった。使者の人選には義弘も相当の配慮をしたことが解った。

上座に坐り掃門は使者の口上をのべた。〈父大内弘世の死去により自分義弘が家督を継ぐことになった。ついては父の命をうけて上洛中のその方は、亡父の命じた事柄と今日までの進行状況を報告し、後命あるまでは幕府との折衝を差し控えるように〉と言う意味のことであった。

〈御使者の子細はよく解ったが、一体幕府は何時居出をなさるお積りか〉

明継の問いに、〈その事については、一応幕府へ差出す書状は持参しているが提出の日取は明継の意見に従うよう〉伝えられたという。

「山口の模様はどうか」

気がかりなことを尋ねた、大内の家人の結束が緩めば、そこに幕府につけている隙が生ずる。それを明継は憂えた。〈掃門が出立するまでは厳に喪を秘し平生をよそうていたが、いずれ義弘と弟の満弘との間に二十五代大内氏当主の座をめぐる継嗣争いが起きるうかから何日まで この状態が続くか予測がつかぬ〉と言う答えである。

今までの幕府との交渉の顛末を述べて、明継は自分の意見を語った〈この効果があがるのは一日でも日数を重ねれば重ねるほど約定の事みがでてくる。しかし日ならずして幕府の探知するところは明らかだ、最近儒の身辺にも異様な動きがある。兎に角、幕府への届出が完るまで、貴公は京へ滞在して呉れ、国許へは儒が書面で知らせることにする〉掃門を休ませて明継は一人部屋に残り想念をこらした。

一刻ほどの館の外で大音でわめく声が聞え、家人があわただしく走りまわる気配がした。碧眼の女人が手燭を持って現れた。その灯りを頼りに、表の車寄まで行くと地面にうずくまり肩口を抑えた一人の男を中心にして家人が声高に話合っている。その男を見て女人が明継の耳口をよせ弥太の手の手答をおそるべきことができた。碧眼の女人は館に引き籠り外に姿は現さなかった。その間にも噂は噂を喚び、大内館の女人の話は活中、洛外だれも知らぬものとなった。

その頃、斯波義継から招宴の使者であると嘯やいた。黙ってうなずき部屋にかつぎこみ肩の傷口の手当をした。思ったより出血が多かったらしく〈館の手前の暗がりから何者かに切りつけられた。怖らくこれを狙ったに相違ありません〉の懐中から書状をとり出して明継に手渡し長酔した。

矢張り予感は適中した。急いで封をとくと、義弘と満弘の確執、それにともなう家中の動き、また宗像との商い、最后にあい夫婦の近況が記されていた。掃門の話と合わせて弘世の死により生じた動きの全貌が脳裏に明確に描かれた。

弥太にどれだけ信がおけるか、しかし迅速に山口の情報を得、かつまた宗像との連絡をとるには弥太の機動力に頼るしか方法はなかった。

決断すると行動は速かった。暗方までに、義弘と弥太、氏俊宛の書状をしたためて江口に待つ便船まで皐馬を走らせた。

その翌日から数日を費し、館の造作について大方の

☆　☆　☆

宗像大社での研修を顧みて

出光興産㈱　第十三期
店主室教育受講生

本社での店主室教育を修了し、福岡へ向う汽車の中での宗像大社のイメージとしては、一日八書紀に述べられているように「汝三神、宜しく道中に降居して、天孫を助け奉りて、天孫に祭かれよ」との御神勅を、皇祖天照大神が宗像三神に下されたのが、この宗像の地であると聞いていたのと、出光店主の形成に大きな影響を与えられ、そしてそれが我社の精神的な土台になっているという認識から一漠然と伊勢神宮のように、大木に囲まれた中に古い神殿が厳然と端座している姿を思い浮べていました。が、宗像大社の祈願殿の前に立ってみると、壮大なコンクリート造りで近代建築の粋をこらした造作と広大な駐車場だったので、何となく拍子抜けしたような気がしました。しかし、白衣白袴と白足袋に身をつつみ、本殿の前に端座し鎮魂していると、月明りと虫の音のみの中で、不思議にも祈願殿の前に立ったときの感じとは逆に、自分が神の懐に飛びこんだような心の安らぎを覚えました。翌日から潔斎にはじまり、奉告祭、日供祭、境内の清掃、神拝作法、講話、鎮魂等と過しているうちに、白衣白袴の窮屈さもとれ、自分が神につかえているという実感が強くなってきました。特に高宮祭場の清掃では、草履をぬいで白足袋だけで武場の落葉を一枚〳〵拾っていると、自分の心の塵を一つ〳〵とりのぞいているようで、何ともいえない清々しい気分で、あたかも心のふるさとをさまよっている感じがしました。

高宮祭場—質素で素朴な祭場—その上に限りなく広がる透き通るように青い空を見上げたとき、何か悠遠のいにしえに通じている、そのような気がしました。

夜の鎮魂—それはわずか三十分たらずですが、正座の苦痛からまぬがれえないものでした。正座することは自分との闘いでした。しかし、足先の感覚がくなってもよいと覚悟すると不思議と心が落ちついたような気がしました。拝殿の簡素な板敷きの上に正座し、灯の消えた中で眼を開くと、吹きさらしの窓から夜空のひろがりが見え、夜気しん〳〵として雄大な気分となる。そして鎮魂は夜の拝殿で正座したときだけではなかった。我々にとっては宗像大社での四日間が全て鎮魂であったともいえます。灯のない境内を斎館まで風呂に入りにゆく道すがら、今此処にいる自分の存在にかかわる全ての人々、又自分をとりまく全ての自然や物に、思いつくまま一つずつ感謝したい気持がして、不思議なほど素直な気持になっていました。

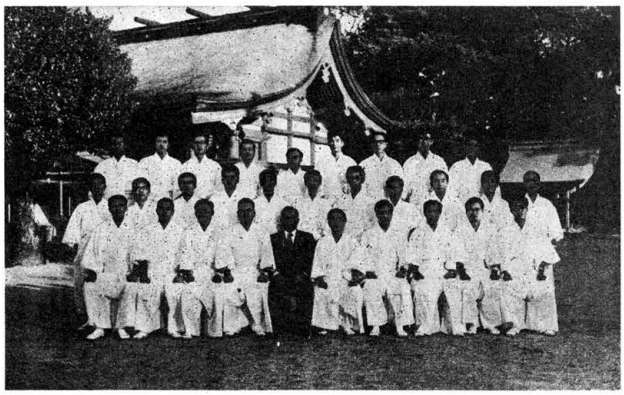
中津宮への参拝—それは今回の研修の中でも特に印象的なものでした。ちょうどその日は風が強く、日頃内海でもあまり舟に乗ったことのない我々にとっては少々こたえたが、昔小舟を操って海上はるか沖津宮まで出向き、厳かな祭りが斎行されていたことを思うと、改めて国家鎮護のため奉られた御神威の偉大さを認識した次第です。又大島の燈台から沖に立つ白浪をみていると、この荒波に打たれつゝ小舟を操って沖の島へ、更に大陸へ渡っていった古代人の雄大なロマンの息吹きが聞ってくるような感じがしました。それにしても、大島について非常にありがたかったのは、最初に出された梅干しでした。小し舟酔い気味だった我々にとって、どれほどおいしかったことか—。

宗像大社での四日間の生活を通して—短期間ではありましたが—神への信仰は、理屈抜きで自分自身の肌で感じるものであることを知らされました。毎日行われているお祭りにしても、素朴に、単純に、昔ながらの姿、形をもって現実に行われていることに驚きました。この現代の複雑な世の中で、これほど素朴さが失なわれていないものがあることは、ただお参りするだけでは到底理解することは出来ないでしょう。理屈抜きでいきるとは、改めて神社とは壮厳で生活してみて、はじめてわかるものではないでしょうか。葦津宮司様のご講話の中に「日本人の生活自体が神道である」という言葉がのりもしましたが、まさにその通りだと思いました。お茶の入れ方、廊下の歩き方、部屋への入り方など礼儀作法はそのまま通用している、頭で考えて行動するのでなく、姿、動作をもって日常生活に溶け込んでいるのです。神に対する崇拝の念についても、中津宮のある大島でみつけました。村の中心が神社であり、神様を中心に生活されていると感じました。古代人はそうであったろうと想像出来ますが、現代にも続けられていることを再認識すると共に、日本人の本来の姿を見せつけられた感じがしました。改めて神社とは壮厳であると同時に親しみやすいものであること、そして神様そのものが日本人にとって血縁であることが深く感じられました。

神地宗像—ここで遠い祖先たちの素朴な生活を見ることが出来たような気がしました。出光店主の言われる「日本人にかえれ—という言葉をこのあたりから見つめ直し、又自分自身をもう一度見つめ直してみたいと思っています。

終りにこのような研修の機会を与えていただいたことを深く感謝致しますと共に、研修中何かとお世話いただきました葦津宮司様はじめ神社の皆様に厚くお礼申し上げます。

さらにいつの日か沖津宮の参拝を祈念して。



西日本菊花大会

宗像の秋を飾る菊展は十一月一日から二十日まで開催した。この菊花大会も第六回目を迎え出品鉢数も二千鉢を超え、九州全域より出品されるようになり、名実共に西日本最大の菊花大会となった。

十一月二日午前十時より審査会が行なわれ左記の各賞が決定した。審査会は、吉安良八福岡県園芸試験場長を審査長に、同場松川研究室長、柏木研究員、小林研究員、吉田専門技術員、筑紫福岡菊花協会理事を審査委員として構成し公正かつ厳正な審査が終日行なわれた。

作品は、各会員の品種改良、技術向上などの努力の成果が顕われ美事な出来ばえで、いずれも甲乙つけがたく、審査は非常に難航した。

本年度から玄海町成人学級生も作品展の他に西日本菊花展にも出品し、高位の成績を記した。学級生も、西日本菊花会高原会長の指導のもと精進をかさねた努力の結晶を披露した。

成績は次のとおり

〈大輪の部〉

文部大臣賞　三井　黒岩九州男
福岡県知事賞　鳥橋　時田　義光
熊本県知事賞　熊本　坂本　竜馬
県議会議長賞　福岡　柴田久米好
〃　福岡　吉田吉之助
宗像大社賞　久留米高山　勉
〃　佐世保大平喜代松
県教育委員会賞粕屋　中野　真
〃　福岡　柴田　六輔
農林事務所長賞佐世保浜田　三郎
〃　門司　駒山　直次
九州花市場連賞嘉穂　川崎　正木
西日本新聞社賞熊本　中山　一郎
〃　佐世保溝口　勇三
宗像大社菊花会賞　福岡　松原勇太郎
〃　粕屋　矢野　定
全日本菊連会賞鹿島　葉瀬垣元夫
福岡花キ連会賞宗像　内藤　熊雄
〃　福岡　中山　保
〃　熊本花キ農協賞熊本　清水　満
佐賀県花キ連賞武雄　青木　藤見
宗像大社氏子会々長賞　宗像　吉崎　三吉
宗像町村長会賞佐世保岡村　弘
〃　熊本　中原　理一
〃　佐世保川村　宗一
〃　粕屋　常盛　勇
玄海町長賞　八幡　惣浜　竜一
〃　粕屋　責谷貞太郎
〃　粕屋　長崎弥太郎
宗像青年会議所賞　飯塚　安永　秀喜
〃　八幡　山崎　正親
〃　佐世保構本　義弘
宗像　荷田　又助
〃　門司　奥野　勝彦
〃　戸畑　松岡　勝美

〈懸崖の部〉

総理大臣賞　春日　海藤義太郎

奉納剣道大会

去る十一月三日、恒例の遷宮記念大会奉納剣道大会が、剣道連盟宗像支部主催により、当社大殿廻境内において執り行なわれた。

今年も郡内各地区より、小学生の豆剣士より一般まで約五百名が参加して盛大に行なわれた。

本大会を郡大会の中心にという動きもあり、旧来を超える大会参加者が集まり、試合は秋晴れの天候のもと午前八時三十分より午后三時すぎまで手に汗をにぎる熱戦が展開された。

成績は次のとおり。

小学校低学年の部
優勝　赤星範行（東部教室）
準優勝　田中玄樹（土道館）
第二位　益田裕司（河東教室）

小学校高学年の部
優勝　石松康弘（河東教室）
準優勝今川嘉津慶（河東教室）
第二位　姉川祥子（河東教室）

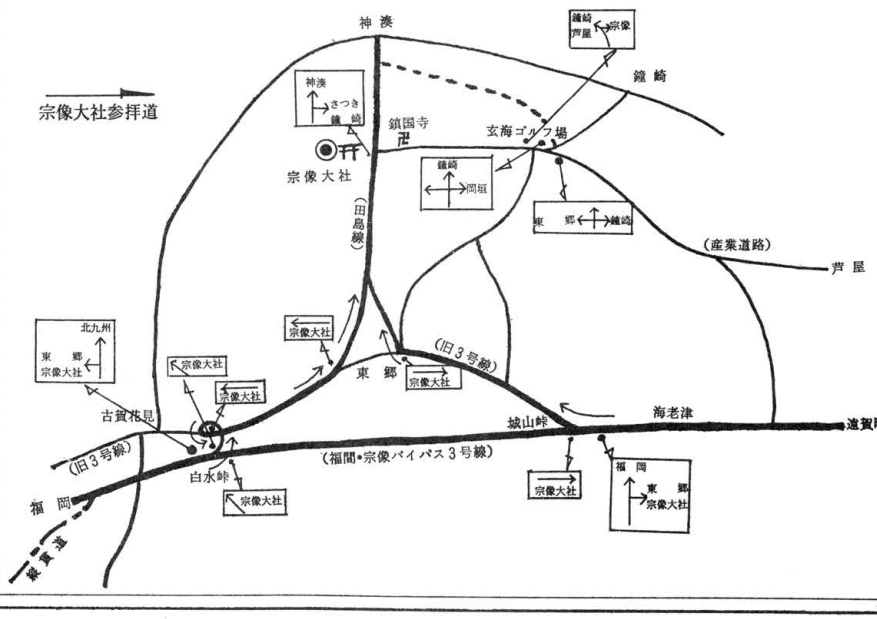
中学生の部
優勝　松本真誠（玄海中学）
準優勝　平島障司（中央中学）
第三位　満留典理（中央中学）

高校大学の部
優勝　木藤裕司（大濠高校）
準優勝　坪井正一（教育大学）
第三位　永野義隆（福工大附属高校）

一般の部
優勝　松葉一徳（宗像署）
準優勝馬場田紀雄（日の里教室）

初詣でご案内

北九州方面からは城山峠分岐より旧三号線に入り、福岡方面からは宗像バイパス白水峠分岐より旧三号線に入って下さい。



〈玄海町作品展〉

〃　武雄　橋口　武夫
〃　門司　池上　福元
宗像町村長会賞　占部ポミ　岩井　光利
宗像町村議会賞　占部ルリ子　立石　智久
宗像大社賞　占部ユキ子　田中　トヨ
宗像大社菊花会賞　中山　繁樹
玄海町長賞　星賀富美子
玄海町議会賞　坂本シズエ　吉武　皐月
玄海町教育委員会賞　楠　理　石丸　国子

第四回奉納盆栽展

第四回宗像大社盆栽展は、十一月十一日から十五日まで開催され、本年度は、玄海町盆栽部会、宗像町盆栽愛好会からの賛助出品もあり、会場である祈願殿ロビーは彩やかな緑一色でおおわれ、参拝者の心を和ませた。

出陳鉢は、大盆栽、ミニ盆栽、実物、花物、群生、寄せ植と各種の鉢物三十八席と木彫や細工物二席と一地域の盆栽展にしては、バラエティーに富んだ美事な展示会となり、益々充実してきた。

またこの展示会と同時に、境内心字池畔では、玄海町農協（深田実組合長）盆栽部会主催の植木交換市も同時に開かれ、玄海松の植木の即売もあり、愛好者に便宜をはかると共に、新人開発にも寄与しているので今後の展示会の発展が楽しみである。

宗像大社歌会
俳句作品集（一六七）

時雨行き時雨ふり返しけり朝すがし　宗像　力丸　一郎

初猟に唐洲の蟹はさばしれる　東京　末次満恒麒

飛んで来て天気をうぐるもズの声　宗像　八尋　恒夫

日めくりを求めて帰る師走哉　福間　廣渡一寸毛

落葉なら箒捉正し鎮国寺　宗像　岡田　無名

ポッカリと月浮く原のぢかな　玄海　有吉　唐水

明日からは師走に入ると暦くる　福間　上野　義夫

満潮に海苔棚沈む秋の暮　藤沢　玄洋　子

西日本新聞社刊・滝口凡夫著

創造と可能への挑戦
―出光佐三の事業理念―

第八章　驚異の製油所

人間都市・徳山

『人間都市づくりの』の理想は、その後の千葉製油所（三十八年一月竣工）兵庫製油所（四十五年一月竣工）北海道製油所（苫小牧、四十八年九月竣工予定愛知製油所五十年竣工予定）でも、徳山と同じように追求されている。

ここでは、千葉を例にとろう。

千葉製油所は、千葉県市原市姉ケ崎地先の埋め立て地に三十七年六月起工、国産技術を使い工期わずか八カ月で竣工した。日産能力十万バーレルの常圧蒸溜装置は、当時わが国最大だった。その二増設し、現在は三十一万バーレルの精製能力を持つ世界最大級の製油所となっている。

佐三は、起工式であいさつで こう述べている。

『ここは徳山とちがい、こうりょうのとおり一農漁村であります。ここに製油所が建設されると、後日かなり新市街ができると思います。新市街は工場と不離一体の形となって、工場のための新市街、新市街のための工場というかたちが、できあがります。

これを日本人なら誰、どういうふうに作りあげるかということが、私どものひとつの夢であります』

すべてが徳山と同じ考えで、規模をさらに拡大した形で進められた。

いま、ノリ養殖の海に建った製油所と純粋な地元の人たちとの間に、なごやかな交流が育ち、新しい都市が建設されつつある。

千葉で特記しなければならないのは、四十二年九月に完成した世界最初の重油直接脱硫装置であろう。

わが国で消費される石油製品のうち、六割ちかくが重油である。この重油の中に含まれる硫黄分が、亜硫酸ガスを発生させ大気汚染は原因となる。しかも、全輸入原油の八割以上を占める中東原油は、世界でもっとも硫黄分が多い。

重油の中の硫黄をできるだけ低めることは、国民的要請なのである。

当時、重油の水素化脱硫技術は、実験著的にすでに完成されていた。しかし、企業化にはばう大な経費がかかり、またかならずしも成功するという保証はない。

世界でだれも、企業化に踏み切るものはいなかった。

出光は、これに先鞭をつけた。

『人間尊重』の理念を貫き、企業の社会的責任を果たすためには金を惜しむべきではない、との考え方からである。

ほんらいならば、せめて企業化のメドをつけるところまでは、政府がやるべきで性質のものであろう。

それを出光は、七十一億円を投入し、自前でやりとげた。

日産能力五万バーレルのRCDの重油脱硫装置は、四十七年三月に完成している。

・アイマックス装置など四つの装置によって、クウェート原油の硫黄分三・八パーセントにまで下げることに成功した。

佐三は脱硫装置の火入れ式のとき、報道関係者にこうあいさつした。

『世界のナゾとなっていた重油脱硫の実行がこんなにスムーズにいったということは、これはまったく天祐神助だと私は感謝しているわけです。

これが一般に広がっていけば、初めて私どもは『国民とともに』と言いうるんじゃないかと思います。

私どもが、『消費者のため』『市民とともに』『国民とともに』というような、どこまでも社会というものを中心に考えて、いろいろなことを経営してきたことが、こんにちひとつのエポックを作った、ということでございます』

四十六年十月には、自動車ガソリンの性能向上と無鉛化をめざして、千葉製油所に流動接触分解装置が完成した。また、兵庫製油所の重油脱硫装置は、四十七年三月に完成している。

第九章　業界の一匹狼

石油連盟を脱退

出光興産は三十八年十一月、業界団体の石油連盟を脱退し『業界の一匹狼（オオカミ）』となった。

直接のきっかけは、石油業法による生産調整が出光にとってきわめて不利であり、竣工したばかりの新鋭千葉製油所を持ちながら、業界でもっとも低い稼動率を押しつけられ、消費者の需要を満たすために市場から高値で製品を調達する、といった状態が続いたためである。

しかし、政府の要請を無視し、業界の大勢にさからうのは、企業として容易にできることではない。経営者としても、よほどの決断が必要である。

佐三があえて、こうした行動をとった背景には、創業いらいの主張である『消費者本位』の石油政策の考え方、そこから派生する統制への反発、混乱と業界にたいする痛烈な批判がある。

復帰したのは、政府の石油政策が転換し、四十一年二月の標準価格撤廃に続いて、同年十月から生産調整が廃止されたときである。

この間約三年、出光興産は独自の生産計画に基づいて石油を精製した。連盟加盟二十社、これにいしただ一社アウトサイダーとして戦いを続けた。

当時、ジャーナリズムから『一匹狼』の異名をたまわられたのは、佐三と本田宗一郎本田技研社長である。なかでも佐三は『本格派』として評価された。

『一匹狼』という呼び名には、何かしらユーモラスな響きがあるが、これは、創業いらいの主張である『消費者本位』の石油政策の考え方、そこから派生する統制への反発、混乱と業界にたいする痛烈な批判がある。

復帰したのは、政府の石油政策が転換し、四十一年二月の標準価格撤廃に続いて、同年十月から生産調整が廃止されたときである。

この間約三年、出光興産は独自の生産計画に基づいて石油を精製した。連盟加盟二十社、これにいしただ一社アウトサイダーとして戦いを続けた。

当時、ジャーナリズムから『一匹狼』の異名をたまわられたのは、佐三と本田宗一郎本田技研社長である。なかでも佐三は『本格派』として評価された。

『一匹狼』という呼び名には、何かしらユーモラスな響きがあるが、これは、創業いらいの主張である『消費者本位』の石油政策の考え方、そこから派生する統制への反発、混乱と業界にたいする痛烈な批判がある。

以上の三点のうち、法的拘束力を持つのは第一の事業、設備の許可制だけである。第二の生産調整、第三の標準価格はいずれも罰則の規定がないが、実際の運用に当たっては許可制を背景に、相当の強制力は持つことができた。

わが国で石油業法が制定されたのは、これが二度目である。最初の業法は、すでに紹介したように満州事変後の九年、松方幸次郎によるソ連石油輸入をきっかけとして生まれた。第一に石油精製、輸入業の許可制、第二に年間輸入量の半分の貯油義務、を規定していたものの貯油義務は捨て、その必要性かかわりに生産と価格の統制をねらったものである。

新しい石油業法制定の背景と経過をみてみよう。

わが国の貿易為替制限の撤廃を求める欧米諸国の要請は、三十四年九月のガット（貿易関税に関する一般協定）東京総会を契機に、急速に高まった。

政府は三十五年六月、貿易自由化計画大綱を決定した。しかし、これにたいする欧米諸国の不満は強く、政府は翌三十六年九月の貿易自由化促進計画によって、自由化スケジュールをさらに繰り上げることになった。

石油は、三十七年十月から自由化することが決った。

政府は石油自由化が決定的となった三十六年七月、通産省内に学識経験者によるエネルギー懇談会を設け、自由化後の石油政策の検討を始めている。十月には、欧州諸国に調査団を派遣した。

懇談会は同年十二月、中間報告をまとめた。

この中間報告に基づいて石油業法の作成が進められたが、石油業界は当時、自由化と業法施行後の混乱の極あった。大手と中小、外資系と民族系といった立場の違いなどで、業法にたいする意見は大きく異なった。

斜陽化の度を強めつつある石炭産業の保護、アラビヤ石油の原油引き取り問題などもある。石油を使う関連業界でも、意見は微妙に食い違った。

法案要綱は、最終決定までに九回も改定される始末だった。

佐三の意見は、はっきりしていた。

経団連は、国会で法案審議中の三十七年四月、佐三のほか大屋敦（経団連エネルギー対策委員長）植村甲午郎（同副会長）中尾哲雄（石油連盟会長、ゼネラル石油社長）山下太郎（アラビヤ石油社長）永野重雄（富士製鉄社長）らの各氏（役職はいずれも当時）による座談会を開いた。

この中で佐三は『最初の通産省案をみたとき、私はまずこれは不必要なものだと思った』と語り、さらにつぎのように述べている。

一、昨年四月いらいの市場の混乱は、たっぷり外貨予算（注、政府は三十六年度の外貨予算を大幅に拡大、輸入ワクを広げた）による過度的なものである。市況はすでに回復してきており、自由化されたあとは必要なだけ輸入する形になり、自然に解決するだろう。

一、民族系石油資本の保護のために業法が必要だという意見はありがたいが、外資もおたがいに競争しており、自由化によって民族系が外資に圧迫されることはない。

一、（中東原油と直結した）日本は、世界でもっとも安い石油に恵まれた国であり、法案が目的とする「低廉かつ安定的な供給の確保」について問題はない。

一、法案の内容（生産調整など）は、その目的と相反するもので、消費者の立場をまったく無視している。

「業法の考え方は、これぞけ需要があるからこれだけ製油所を作り生産する。つまり、生産が先ないんだ。そりゃ理屈からいえは、きちんと合ってて、りっぱなんだが、そうじゃなくて、販売を主として、それに製油所をくっつける。これが『運営』というものだと」

佐三は石油審議会に参考人として出席したとき「これは『学識無経験者』からみればりっぱな法律だろうが、私のように一生を石油にささげておるものからみれば、天下の悪法である」と激しく批判していた。

もともと、無底した統制きらい、自由競争主義者である。それが「消費者のため」と信じている。だから、政府にたいしては『自由化の旗印を掲げながら、国内産業を統制する業法を作るとは何ごとか』という気持ちがあった。

民族系石油資本の中で、出光はただひとり終始、石油業法の制定に反対した。国会内外の論戦も活発だったが、五月にはついに可決成立した。

石油業法の施行に伴い、石油各社は三十七年度下期（三十七年十月―三十八年三月）の生産計画を政府に提出した。

ところが、各社の計画を合計すると、政府の供給計画より約二〇パーセント多い。これをどう圧縮するか、また何を基準に各社の生産ワクを決めるか。石油連盟の需給委員会が、通産省と協議して作業を進めた。

出光は、政府の供給計画を約一〇パーセント上回った生産計画を主張した。上回る分はいわゆる『踊り場』であり、上回る分はいわゆる『踊り場』を設ければ、販売力の強い大手がその分をとってしまい、自分たちのシェア（市場占拠率）がそれだけ落ちるからである。

このあたり、各社それぞれの立場で、駆け引きはなかなか微妙である。

結局、中小各社の主張が通り、前例にはしないとの条件で、きっちり供給計画に合わせた生産計画が作られた。各社への配分は、設備能力、生産実績、販売実績―いわゆる三本柱を基準とすることになった。

もっとこの三本柱も、中小各社にたいする優遇対策などでかなりゆがめられたものとなった。

生産調整は、これでスタートした。

予想どおり、市場は混乱した。需給関係はひっぱくしているのに、逆に市況は低落した。経済常識からいえば、需要が供給を上回れば価格は上昇する、それが、反対に価格が下がったのである。

なぜか。販売力の強い大手は、計画で決められた生産量だけでは製品が足りない。だから、需給関係はひっぱくする。逆に販売力の弱い中小は、割り当てられた生産ワクだけ売ることができず、どうしても製品が余ってしまう。これが市場を混乱させ、全体として市況は下がる。

大手は、需要家が要求するだけの石油を供給するためには、中小業者から供給を受けるか、いったん市場に出回っているものを高い値段で買い入れるほかなかった。

（つづく）

児童の遊戯・玩具

一年のしめくくりの月であり、年間を通して最も日中の短い月である。日本海側や北日本ではすでに降雪もあり、この月の別名として「極月」はまずわかるとして師走の呼称が通例になっているのは、やはり一般に師匠までも走り出す月、という人間味をともなった語感のせいであろうか。

花火

火薬にほかの化学薬剤を配合して筒に詰め、火を点して空中に打ち揚げると、割薬（炸薬）の作用によって、美麗な彩光や彩雲を展開し、見物を楽しませる。煙火・起火とも書かれる。わが国の起源は、天文十二年（一五四三）鉄砲伝来と共に硝石の配合を伝えた後一番早くにさかのぼる伝説があり中国古代の狼煙（のろし）も、その類のものであった。しかし現今のような花火の出現は、火薬の発明より少し遅れ、十三世紀の末ごろイタリアのフロレンスに始まりそれからフランス、イギリス、ドイツ等ヨーロッパ諸国にひろがったのが、十六世紀ごろ、わが国には南蛮人が伝えた。火術専門の武家はこれを軽視したので、民間の技となった。慶長十八年（一六一三）夏の徳川家康の花火見物は唐人に行わせたもので、日本の花火師はこのころから研究を始め、慶安元年（一六四八）には花火が流行し、花火売は見重玩弄用の煙花火・線香花火を売り歩き、幕府は町中で単火・流星などの花火（煙火玉打揚）を行うのを禁止する触書を出すほどに進歩していた。「和漢三才図会」などには花火の製法が記されているが、江戸時代後期には種々の打上花火が作られ、番付さえも生れた。文化・文政のころには江戸の両国橋や仲島の花火は年中行事となり、両国吉川町の玉屋は花火屋の筆頭であった。

童謡

字の示す通り童の謡う歌である。童謡は原始人が集団生活を始め、集団に共通する歌を持つようになった同時に発生したものと思われるが、それがどんなものであったかはわからない。わが国で童謡の語が出てくるのは「古事記」や「日本書紀」であるが、これは諷刺や予言をこめたもので、子供の謡う歌ではない。ようやく子供らしい歌が見られるのは、平安時代も末のことである。童謡はほとんどすべて、いつ、誰が作ったかは全くわからない、同じ童謡でも、地方地方によって歌詞にも異同があり、曲節もふしずつちがっているのが普通である。しかし子供の生活は、いつの時代でも、またどの地方でもそう変らないものであるから、童謡にもいくつかの類型は摘出できる。四季折々の自然現象を取扱ったものとしては「一つ星見つけた宵宵なあれ」とか「お月さまいくつ、十三七つ」「夕やけ小やけ」「雪やこんこん」、あられやこんこん」など、素直な童心に映った月・星・夕焼け・雪などが、幼い表現の中に子供の情緒や願いを表わしている。また動物、特に虫や鳥は、子供の生活と深いつながりを持っている。

このような童謡を記録したものとして、江戸時代の宝暦・明治・大正年間という人が「童謡集」をつくっているが、古来の童謡がほんとうに注目され、集成されたのは明治以後のことである。明治三十一年（一八九八）大和田建樹が「日本歌謡類聚」を出版してから、四十年の前田林外の「日本民謡集」に手毬唄と子守唄が収められ、四十二年には童謡研究会によって「諸国童謡大全」が集成され、さらに昭和年代になって、高野辰之博士の「日本歌謡集成」巻十二に集大成されたといえよう。しかしこうした古い童謡だけでなく、大人の手で詩情を豊かに盛り、しかも童心・童語の歌謡を与えようとする気運が、大正七年に発刊された鈴木三重吉の「赤い鳥」に刺激され、やがて北原白秋・西条八十・野口雨情・蕗原幽らによって、現在見られるような童謡が出発するのである。